

橋の価値とは、そしてそれを伝えることとは

濱田, 秀則

<https://hdl.handle.net/2324/7432804>

出版情報 : Bridge and foundation engineering. 60 (2), 2026-02-01. 株式会社建設図書
バージョン :
権利関係 :



橋の価値とは、そしてそれを伝えることとは

Hamada Hidenori

濱田 秀則*

およそ 3 年ほど前から、ある古いコンクリート橋とお付き合いをさせていただいています。その橋は福岡県の東峰村というところにある“塔の元橋”という橋齢が 100 年を超えた RC 橋です。100 歳を超えているとは思えないほどコンクリートもしっかりしていて、何よりもそのたたずまいが美しい橋です。定期点検の一環として行われた調査結果から、中性化深さが既に 50 mm を超えて鉄筋の位置まで到達しており、今後急速に鉄筋の腐食が進行していくことも予想されました。このため、再アルカリ化工法を適用しさらに長寿命化を図ってはどうか、と提案しましたが予算が厳しく全面的採用には至りませんでした。しかし、橋台の一部に再アルカリ化工法を試験的に適用し、施工後の状況の経時変化を継続的に調査しています。この一連の過程において、橋の価値とは何だろう、橋のすばらしさとは何だろう、またそれを一般の人々に伝えるにはどうすればよいのだろう、と考えることがあり今もその問いの答えを探し続けています。

私は以前、インフラの重要性を専門家ではない一般の人々に説明するにはどうすればよいか、ということを考えたことがあります。その時に出会った成瀬勝武氏による「橋」という古い本の中に次のような記述がありました。「・・・およそ橋梁の興廃は国の盛衰に比例し、文化の程度に比例する。それは、国運の興隆及び文化の発展は必然的に陸上交通を盛んならしめるからであって、世界のいつの世、いつの時代にあっても同じであり、欧州の中世暗黒時代の如きにおいては橋梁史においてもまたはなほだしい暗黒を観るのである・・・」この記述は交通ネットワークの重要性を示しているとも捉えることができ、そのネットワークを構成するために必要となる橋の重要性を説いたものとも考えることもできます。いずれにしても、橋単体ではなく橋梁群としての重要性を説いたものであり、個々の橋に着目しての記述ではないように思われます。

私はまた、福岡市内の道路ネットワークの中で橋梁が果たしている役割について、同市において毎年 12 月に開催されています“福岡国際マラソン”を例に取って評価を試みたことがあります。同マラソンは毎年 12 月の第一日曜日に開催され、国内外から一流選手が参加します。古くは、宗兄弟、瀬古、中山、谷口などの世界的なランナーが走っています。(かなり古くて恐縮です。ちなみに 2025 年 12 月の大会では、エチオピアの選手が優勝し 2 位に日本人の選手が入りました。)このマラソンのコースの中にいくつ橋があるのか、また、その長さはどれくらいかを調べてみました。その結果、コース全長 42.195km の中に 14 の橋があり、平均的には 3km に 1 橋の割合で橋を渡ってい

ることになりました。また、14 橋の総延長は 1.41km(1414m)となり、コース長である 42.195km に対しては約 3.5% の割合となりました。福岡市内の道路ネットワークを市民一人一人がどのように利用しているかを調べ上げることはもちろん不可能ですが、人々は個人個人のマラソンコース(通勤・通学コース)を毎日移動しています。幾分かの誤差はありますが、福岡市内である場所からある場所まで道路を利用して移動する場合、その距離の約 3.5% は橋を渡らなくては到達できないことになります。少し粗い想定ですが、福岡市の住民の中の 100 万人が 1 日に平均 1km 道路を利用しているとしますと、1km×100 万人=100 万 km・人が延べ移動距離となり、そのうちの橋梁部分は 3.5% の 3.5 万 km と計算されます。この距離は地球 1 周の距離に相当します。福岡市内における橋梁の存在価値の大きさを一般の人々に説明することを目的として計算してみた結果ですが、このような説明で人々は納得してくださるでしょうか。もちろん、もっとよい説明の方法がいくつもあると思いますが、いずれにしても、インフラの価値の代表として橋梁群の価値、橋梁の重要性を説明しようとしたものです。

それでは、一つ一つの橋の価値、また素晴らしさとは何なのか、それをどのように説明すればよいのでしょうか。私事で恐縮ですが、私には忘れられない橋がもう一つあります。それは関門橋です。1973 年 11 月に開通していますが、テレビニュースで見たその開通式の様子が当時小学 6 年生だった私の脳裏に刻まれました。中学時代にサイクリングに出かけては何度も関門橋を眺めることがあり、その大きさと美しさに圧倒された記憶が鮮明に残っています。その記憶が大学で土木工学を専攻することを決めた背景ともなりました。このように、一人一人に記憶に残る橋があるとすればそれは一人一人異なるものであり、記憶に残る理由もまた一人一人異なるものなのでしょう。

橋に限らず土木という営みは音楽に似ていると思うことがあります。音楽は誰もが自由に聴くことができる、橋は誰もが自由に利用すること、自由に見て楽しむことができるという共通点があります。また、その受け止め方は一人一人異なるものとなります。このように考えますと、“名曲=名橋”という図式が成立するようにも思います。名曲は多くの人に時代を超えて愛されるものですが、名橋も時代を超えて愛されるものと言えると思うからです。冒頭で紹介しました塔の元橋ですが、ほぼ 3 か月に 1 回電位などの測定のために訪れています。訪れるたびに少しずつ愛着が湧いてきたことを実感しています。私の中では忘れることのできない“名橋”となりつつあるのだと思います。